阮籍の「首陽山賦」について

沼口勝

一

魏の阮籍（字嗣宗、二一〇～二六三）の「首陽山賦」は、伯夷・叔斉の言行を批判する内容をもち、しかも司馬氏による魏朝簒奪が進行する時期に制作された賦であり、さまざまな問題を含む、なかなかに難解で、且つ重要な作品と思われる。[1]

よく知られているように阮籍というこの作家は、ことばの奥にきわめて隠微なかたちでその真意を潜ませることが多く、阮賦を理解するにはよほど周到な準備がなくてはならない。そこで私はさきに「阮籍首陽山賦訳註初稿」と題し、この賦についての拙い註釈を発表した。[2] 小論はこの「初稿」を基礎として、この賦の制作時期および動機、内容上の問題点などにつき論ずるものである。

なお、テキストは明の張溥『漢魏六朝百三名家集』中の「阮步兵集」を用いた。

二

「首陽山賦」の制作時期は、その序文から魏の正元元年（二五四）十月以後と判定される。そこでまず正元元年十月を中心として、その前後の政治情況を見、次に作者阮籍の伝記的事迹と序文とを関連させ、この賦の制作動機を探る手懸りとしたい。

『三国志、魏書』三少帝紀の記載から抜萃し左に掲げる。

（嘉平六年春二月）庚戌、中書令李豊與皇后父光祿大夫張緝等謀廢易大臣、以太常夏侯玄爲大將軍、事覺、諸所連及者皆伏誅。

（秋九月）大將軍司馬景王將謀廢帝、以聞皇太后。甲戌、太后令曰、（略）是日遷居別宮、年二十三。丁丑、令曰、……高貴鄉公髦有大成之量、其以爲明皇帝嗣。

（十月）庚寅、公入于洛陽、……其日卽皇帝位於大極前殿、（略）大赦、改元。

（正元元年冬十月）癸巳、假大將軍司馬景王黃鉞、入朝不趨、奏事不名、劍履上殿。

甲辰、命有司論廢立定策之功、封爵、増邑、進位、班賜各有差。

李豊・張緝ら朝廷派が夏侯玄を担いで司馬師（景帝）失脚を画策、発覚して謀叛の罪により誅殺されたのは、この年二月のことである。豊・玄・緝らの三族は夷滅され連座する者多く、この事件の影響は広く深かった。そして九月、ついに天子（斉王芳）廃位へと波及する。皇太后に対する不孝、それが廃位の名目であった。新たに天子に立てられたのは文帝の孫、東海王霖の子の高貴郷公髦であった。この人選は皇太后の希望によったと、裴注引『魏略』には(3)いう。同じく『魏氏春秋』に、新主はどうかと司馬師が問うと、鍾会が「才は陳思（曹植）に同じく、武は太祖（曹操）に類す。」と答えた、師は「若し卿の言の如くならば、社稷の福なり。」といったとある。(4)

新天子の即位に伴い元号が改まる。嘉平六年十月が正元元年十月に改まった。「庚寅」の日は陰暦の五日であるが、新年号は一日に溯り施行されたであろう。また「甲辰」の日は陰暦十九日に相当する。(5)この日、この度の廃立に功労あった者に封爵・進位が賞賜されたのであった。「三少帝紀」の記載を整理すると、以上のごとくである。

それでは右のような情況下、阮籍はどうしていたであろうか。『晋書』本伝により、この前後の時期に該当する記載を見ることとしよう。

及曹爽輔政、召爲參軍、籍因以疾辭、屏於田里、歳餘而爽誅、時人服其遠識。宣帝爲太傅、命籍爲從事中郎、及帝崩、復爲景帝大司馬從事中郎、高貴鄕公卽位、封關內侯、徙散騎常侍。

曹爽の参軍を病を口実に辞し、郷里に隠退していた阮籍は、司馬懿（宣帝）の下で従事中郎となり、懿の死後もその子司馬師の下で引き続きその職にあり、新天子即位に伴う封爵・進位の賞賜により関内侯、散騎常侍となったのであった。「首陽山賦」の序文の内容もこれに符合する。左に掲げる。

正元元年秋、余尙爲中郎、在大將軍府、獨往南牆下、北首陽山、賦曰、

序文の意は一見まことに明快である。「正元元年の秋、わたくし籍は引き続き従事中郎として、大将軍司馬師さまの府署におりましたが、ある日独り南の牆（ついじ）の下に往き、首陽山を北にして、感懐をうたいました。」という、きわめてさり気ない書き振りである。

ところがその「秋の一日」が、天子廃立の行われた暗鬱な政治的季節の一日であること、既述した通りである。賦

の冒頭二句にいう、

在茲年之末歳兮　茲の年の末歳に在り
端旬首而重陰　端旬の首にして重陰あり

この「端旬首」の三字を「端(はじ)めの旬(とおか)の首(ついたち)」と読むならば、賦中に秋の風物たる「蟋蟀」「鶗鴂」の表出されることから、その「秋の一日」が実は「正元元年十月一日」であることを、作者自ら賦中に言明していることとなる。新天子即位の数日前のことである。

阮籍は従事中郎としてあまり勤勉ではなかったらしい。後述するように、賦中のことばはそう伝えるのである。そうした作者が、新天子の即位が決定し、天下が司馬氏のものであることの判然とした情況の中で、いよいよ自己の態度決定を迫られている時期の一日、それが首陽山を眺め感懐をいだいたこの序文にいう一日であった。

ところで、序文の首句「正元元年秋」とあるのは、十月であれば「冬」とすべきではないか、という疑念をもたれる読者もおられよう。私もまたそうであったが、この年陰暦十月一日は、太陽暦の十月二十九日に相当し、立冬以前の晩秋の季であることを思えば、こうした疑念も氷解するのである。

最後に首陽山について説明したい。

夷斉の隠れた所と伝えられる首陽山の所在については諸説あるが、この賦にいう山は、今の河南省偃師県の西北、邙山（北芒山ともいう）の最高処がそれである。漢魏の洛陽城の西北、約十二キロメートルの距離にあったはずである。(6) 諸書に引くその山に関する記載を一二挙げれば、左のごとくである。

○洛陽東北首陽山有夷齊祠。（『史記』伯夷列傳「正義」引、戴延之『西征記』）

○河水南對首陽山、春秋所謂首戴也、夷齊之歌所以曰登彼西山矣、上有夷齊之廟、前有二碑、竝是後漢河南尹廣陵陳導・雒陽令徐循與處士平原蘇騰・南陽何進等立、事見其碑。（『水經注』河水注）

邙山には魏文帝曹丕の陵（首陽陵）および晋宣帝司馬懿の陵（高原陵、邙山の東北）がある。古来貴人の墓所の多くある所として知られる。私事にわたるが、先年洛陽の白馬寺を訪ねた折、邙山を見る機会に恵まれたが、その山はなだらかに長く続く丘という印象を受けたものであった。

三

「首陽山賦」は、六言句を用い（篇中「此進而不合兮」の一句のみ五言句）、隔句韻で、その無韻の句末に兮字を置く典型的な「離騒」式の句法からなる、いわゆる「騒

体」の短賦で、全篇四十六句の作品である。

さて、賦はその内容から前後二段に分かれる。前段は、周囲の者による悪意の中傷に会い孤立する作者が、それでもなお世俗の中で生きることにより自己の真実を実現したいと述べるものであり、後段は、夷斉が初め西伯昌（周の文王）に身を投じながら、武王の紂討伐の挙に反対したのは仁義にかなうものではない、生命を傷い、名誉を求める行為だと批判する内容のものである。以下にそれらの内容につき、やや詳細に検討を加えるが、説明の便宜上、前後段をそれぞれ二分して論じたい。

（前段）

1 在茲年之末歳兮　茲の年の末歳に在り
2 端旬首而重陰　端の旬の首にして重陰あり
3 風飄回以曲至兮　風は飄回して以て曲至し
4 雨旋轉而纎襟　雨は纎襟に旋転す
5 蟋蟀鳴乎東房兮　蟋蟀　東房に鳴き
6 鶗鴂號乎西林　鶗鴂　西林に号ぶ
7 時將暮而無儔兮　時将に暮れんするに儔無く
8 慮悽愴而感心　慮は悽愴として心を感がす

最初の二句が、正元元年十月一日を指す可能性のあることは既述したとおりである。この空が厚い雲に覆われた日の印象と孤独感とを、作者は以下の六句に連ねていう。すなわち、飄風に混じって降りしきる雨に薄絹の衣の襟元を濡らしつつ、自分は大将軍の府署の南牆の下、東房に鳴く蟋蟀と西林に号ぶ鶗鴂の声を聞く、年の暮れようとするこの時、親しい儔匹のない孤独に悽愴として胸が疼くのだ、と述べている。

古直『阮嗣宗詠懐詩箋』は「詠懐詩」其三（「嘉樹下成蹊」の句を以て始まる一首）および其九（「歩出上東門」）の詩を、この賦と同時の作と推測する。(7) この推測が当たっているとするならば、阮籍にとってこの日の印象と彼のいだいた孤独感は、よほど忘れ難いものであったことになるであろう。なぜならば、詩の中でも作者はそれを繰り返しいうからである。其九の詩を一部引用する。

5 良辰在何許　良辰　何許にか在る
6 凝霜霑衣襟　凝霜は衣襟を霑す
7 寒風振山岡　寒風　山岡を振がし
8 玄雲起重陰　玄雲　重陰を起こす
9 鳴雁飛南征　鳴雁　飛びて南に征き
10 鶗鴂發哀音　鶗鴂　哀音を発す
11 素質游商聲　素質は商声に游る

12 悽愴傷我心　　悽愴として我が心を傷る

賦の発端がこのように抒情を以てする例は、阮賦六篇（東平・鳩・獼猴・清思・元父の五篇および首陽山賦）中この賦のみである。そしてその抒情が、作者にとって忘れ難い重要な意味をもつ日のものであることを、私は注目したいと思う。

さて、さらに賦の続きを見よう。

9 振沙衣而出門兮　沙衣を振ひて門を出づれば
10 纓委絶而靡尋　纓と委とは絶えて尋ぬる靡し
11 步徙倚以遙思兮　歩んで徙倚して以て遙かに思ひ
12 喟歎息而微吟　喟として歎息して微吟す
13 將脩飭而欲往兮　將に脩飭して往かんと欲すれども
14 衆讎讎而笑人　衆は讎讎として人を笑はん
15 靜寂寞而獨立兮　静かに寂寞として独立す
16 亮孤植而靡因　亮に孤植すれども因る靡し
17 懷分索之情一兮　分索の情の一なるを懷くも
18 穢羣僞之射眞　群偽の真を射ふを穢しとす
19 信可實而弗離兮　信に実かにして離れざる可し
20 寧高擧而自儐　寧んぞ高挙して自ら儐けんや

9句「沙衣」は「紗衣」と同じ、ちぢみの薄絹の軽い衣をいい、儒者の着る衣でもある。作者の散文の作品「達荘論」に登場する「縉紳好事之徒」が、自らの儒家の徒たることを誇って、「沙衣を被、飛翮を冠し、曲裙を垂れ、…」と語ることばにも「沙衣」が現われる。また、「纓委」は冠の紐と冠のへりまきをいう。

9 10の二句は、儒者の衣と冠とをつけ出仕しようとするが、久しく休んでいたので衣にはちりが積もり、冠の紐とへりまきは絶ちきれていて尋ねようもないといい、作者の出仕に対する消極的な態度、鬱屈した心情が表出されるのである。そして、この心情を慰める対象を見出そうと、作者は彳徊躊躇したあげく、遙かにある友を思うのであるが、その人には会えるはずもなく、いたずらに歎息微吟するばかりであったというのが、11 12句の意である。

かくして、作者は結局身なりを整え出仕しようとするのであるが、そうした己が姿を見れば、衆人は歯並みの不揃いな醜い口を開けて嘲笑するであろうと、13 14句に述べるのである。14句「讎讎」は歯並みの揃わぬさまをいう語である。

続く15 16句は、周囲の俗衆の嘲笑の中で、誰ひとり自己の志を理解してくれる者のいない孤独を抱え立ちつくす作者の姿をいう。16句「孤植」の語は、たったひとり志を立てる意である。

それでは、その「孤り植てる」志とは、いったい何をいうのか。それは17句「懐分索之情一分」、すなわち敢て友と分かれ索れてまで固守しようとする作者の真情（真実）であると思われる。ところが、その作者の真情は俗衆の理解するところではなく、かえって羣くの偽りが作者の真情へと加えられる、それを穢わしいと思うと作者はいう。それが18句の意である。

俗衆の誤解中傷の渦中にあって孤立する自己の真情を、いかにして明らかにすべきか、作者は自問自答する。そして、その途は結局この俗世の汚濁の中に自分が生きることにより実現する外にない、自ら俗世から身を退け、ひとり高挙することは真情を実現する途ではないと作者はいう。それが1920句の意である。「高挙」は隠遁または仙遊をいうものと思う。

抒情的な調子で始まった賦は、13句以降、周囲の俗衆と作者との対立の相を露にしつつ、次第に議論的な調子へと変化してゆく。賦の後半はその傾向を一層濃厚にする。ここでは、俗世の汚濁の中に孤独に生きぬくことにより、自己の真情を実現しようとする作者が、その主張を以て夷斉の生き方を批判したものである。

（後段）

21聊仰首以廣頫兮　聊か仰首して以て広く頫め
22瞻首陽之岡岑　首陽の岡岑を瞻る
23樹叢茂以傾倚兮　樹は叢茂して以て傾き倚り
24紛蕭爽而揚音　紛として蕭爽として音を揚ぐ
25下崎嶇而無薄兮　下は崎嶇として薄る無く
26上洞徹而無依　上は洞徹して依る無し
27鳳翔過而不集兮　鳳は翔過して集はず
28鳴梟羣而竝棲　鳴梟は群して竝び棲む
29颺遙逝而遠去兮　颺がりて遙かに逝きて遠く去り
30二老窮而來歸　二老窮して来り帰す
31寔囚軋而處斯兮　寔に囚軋されて斯に処る
32焉暇豫而敢誹　焉んぞ暇豫ありて敢て誹らん
33嘉粟屏而不存兮　嘉粟は屏けられて存せず
34故甘死而採薇　故に死を甘ふて薇を採る
35彼背殷而從昌兮　彼れは殷に背きて昌に従ひ
36投危敗而弗遲　危敗に投じて遅れず
37此進而不合兮　此れは進んで合せず
38又何稱乎仁義　又何ぞ仁義に称はん

最初の二句は、なんとはなしに振り仰いだ作者の目に、日ごろ眺め親しむ首陽の山の姿が映ったことをいう。ここから夷斉に対する作者の議論が始まることになるのである

が、その前にまず首陽山の姿が四句を費して述べられる。そして、ここに描出されたその山は、木々がいっせいに不安な声をあげ、人を寄せつけない険しさで聳立する姿をとることに注意したい。

作者はさらに首陽山を、賢智の人に喩えられる鳳凰も飛び過ぎて集まろうとしない、そして、小人に喩えられる梟の群棲する所だといい、鳳凰の高く遠く飛び去ったこの山に、夷斉の二老は窮してやって来たのだという。それが27～30句の意である。首陽山は聖なる山ではなく、忌むべき俗界として強調されている。

漸層的に強まる首陽山の険悪なイメージは、31～34句の二老の伝説に対する作者の解釈によって、救いようもない闇黒に包まれる。この四句を拙訳によって示すならば、左のごとくである。

「二老はまことに武王に囚われ車で軋かれる刑に遭い斯に処ったのです。どうして天命を誹る暇豫などあったでしょうか。嘉き粟は屏けられてここに存りませんでした。それ故に、彼らは死を甘うて薇を採り餓えをしのいだのです。」

夷斉の伝説に対するこのような解釈が当時行われていたものか否か、私は知らない。おそらく作者が過去の歴史事実や現実の事例に照らして下した推断であろう。漢朝より受禅した魏の文帝曹丕が、即位の礼の畢るや否や、群臣を顧て、「舜禹の事、吾これを知れり。」といったという逸話(8)を、私は想起する。阮籍の鋭く深い現実認識が、「義として周の粟を食らはず、首陽山に隠れ、薇を採りこれを食らう。」と伝わる二老説話の仮面を剥いで見せたものだと思う。

さて、次に作者は、35～38句で彼らが殷に背き西伯昌に従おうとしたのは、危敗の事態に身を投じ遅れまいとしたのだといい、にもかかわらず武王の紂討伐の挙には進んで合わせようとしなかった行動は、一貫しない、仁義に称うものではないと批判するのである。35句「彼」は「あの場合は」の意、37句「此」は「この場合は」の意と解した。

39 肆壽夭而弗豫兮　寿夭を肆にして豫はず
40 競毀譽以爲度　毀誉を競ひて以て度と為す
41 察前載之是云兮　前載の是に云るを察すれば
42 何美論之足慕　何ぞ美論の慕ふに足りんや
43 苟道求之在細兮　苟くも道に求むるは之れ細に在り
44 焉子誕而多辭　焉んぞ子は誕にして辞多き
45 且清虛以守神兮　且く清虛にして以て神を守り
46 豈慷慨而言之　豈に慷慨して之を言はんや

最初の二句は押韻からすると41句以下に属するが、意味上は前から続くと見たい。この賦では韻の転換と意味のそれとは必ずしも一致しない。

さて、この二句のいうところは、夷斉が餓死したのは生命を恣意的に傷うもので、それは毀誉にとらわれたからだというのである。この批判はいうまでもなく『荘子』の駢母篇に、「伯夷は名に首陽の下に死し、盗跖は利に東陵の上に死す。二人は死する所同じからざれども、其の生を残(そこな)い性を傷つくるは均しきなり。」とあるのに基づいている。

夷斉を批判した作者は、結びの六句で、苛酷な世に生きるための戒めをいう。すなわち、前代、夷斉の事実がかく悲惨であった例(たぐ)しに鑑みれば、美論は慕うに足りない、道義に行為の基準を求める場合は、細事にまで配慮する慎重さこそ必要だ、放誕と多言とは危険を招くから、清虚の態度をとり精神の安らぎを保守し、決して慷慨して発言してはならないと述べるのである。

ここで一つ問題となるのは、44句「子」が誰を指すかということである。私の考えでは、41句「前載之是云」が夷斉のことをいうとすれば、「子」に夷斉を当てるのは誤りで、11句において作者が「遙思」の対象とした友、または二人称を用い自身を呼んだかのいずれかでなければならない。おそらく作者は友と自身とに向けて「子」といったと解するのが、最も穏当なところであろうと思う。

阮籍を親友の嵇康は、「阮嗣宗は口に人の過ちを論ぜず、(略)物の与(たぐ)に傷つくこと無し」と評し[9]、また司馬昭(晋の文王)は「至慎」と賛えた[10]。この賦の末尾の戒めは、作者の慎重な生き方がよく示されているといえよう。

四

この章では、右に検討した結果を踏まえ、「首陽山賦」について私のいだく全体像とでもいうべきものを明らかにし、あわせて「詠懐詩」其三・其九などの詩篇との質的異同についても考察を加えたい。

司馬氏による李豊・夏侯玄ら反対勢力の弾圧と粛清、そして天子の廃立という苛酷無慙な事件を眼前にして、阮籍は自己の態度決定を迫られた。これが彼にこの賦を書かせた直接の動機であることは疑いがない。

但し、態度決定を迫られたといっても、それが司馬氏の迫害強制によるものという意味では必ずしもない。すでに見たように阮籍は、司馬懿が太傅となるやその従事中郎に招かれ、以後数年その幕下にあり続けてきたからである。そして、彼のこの出処進退は、彼が司馬懿に付く前、曹爽の参軍を辞して時人を感服させたことのある、外ならぬそ

の「遠識」によると考えるべきであろう。

「嗣宗　当時大将軍の保持する所と為ると雖も、実は則ち窮して来帰し、囚軋されて斯に処るなり、『一身すら自ら保せざるに、何ぞ況んや妻子を恋ひんや』とは、豈に病無くして呻かんや」（古直『阮嗣宗詠懐詩箋』の「其三」の詩注の評語）というまでの悲境に、阮籍があったと私には思われない。既述したごとく賦のことばからすると、阮籍の職務に熱心でなかった形跡も窺われるのである。司馬氏もそうした阮籍の態度を黙認していたのではないか。

阮籍に自己の態度決定を迫ったのは、外からではなく、むしろ彼の精神の内奥からの力ではないか。彼の伝記に、「籍　本済世の志有り」と伝える、いわば彼の胸底に潜む良心とでもいうべき至純の魂が、時勢の帰趨を冷静に見定め処世の態度を決するあの「遠識」を背後から撲ったのである。

それではなぜ阮籍の魂は、彼の「遠識」を撲つことになったのか。その契機を、賦の前半で「遙思」する対象として暗示され、後半で「子」という語により明示されている阮籍の友と思われる人と阮籍との関係に求めたいと、私は思う。その友と思われる人は、現在もしくは過去において、阮籍と異なる政治的立場に立つ、もしくは立った人であろう。そしてその人に対して、阮籍はなぜ自分が司馬氏に帰属するのかを釈明する心理的必要に駆られているのである。これが作者にこの賦を書かせた真の動機だと思われる。

司馬氏による天下制覇がほぼ確実化し、その傀儡ともいうべき高貴郷公髦の即位直前の時期、ある友に対する想いが作者の魂を揺り動かし、それが司馬氏に帰属する態度を彼にとらせ続けてきた「遠識」を烈しく撲ったところに「首陽山賦」が成立したと右に述べた。それではその作品は、作者の精神のいかなるドキュメントになり得ているのか、はたまた然らざるかを次に見てゆきたいと思う。

「首陽山賦」の前半で、作者は俗衆の嘲笑の渦中に孤立する自己を描き、友と敢て離れてまでも守らねばならぬ自己の真情（真実）のあることを主張する、またその真情は俗世の中に生きてこそ実現し得るものだと強調しているように思われる。作者のいう真情とはいったいどういうことなのか。私はそれを結局自らの生命をどこまでも愛惜する心情をいうと理解する。作者のこの真情こそが、賦の後半に展開される夷斉批判の核となるものである。

作者の夷斉批判は凄じいまでに徹底的であるといえよう。聖地首陽山は、ここでは邪悪の鳥の群棲する俗界とし

て描かれる。そして義のために餓死したはずの夷斉は、殷周の間を右顧左眄したあげく処刑餓死させられた定見をもたぬ売名残生の徒だと決付ける。

ところで、後漢から魏にかけての作品で、夷斉を主題とするものの数は決して少なくない。たとえば『藝文類聚』（人部「隠逸」上下）には、後漢では杜篤「首陽山賦」・胡広「弔夷斉文」・蔡邕「伯夷叔斉碑」、魏では王粲「弔夷斉文」・阮瑀「隠士詩」「弔伯夷文」・靡元（『太平御覧』五百九十六に「糜元」に作る）「弔夷斉文」などの諸篇が採られている。そして、これらの諸篇は、靡元の作を除き、すべて夷斉を賛えるものばかりである。靡元の作にしても、周という聖世に居りながら、殷を棄てずして餓死した夷斉の過ちを痛むものにすぎない。阮籍のごとく、首陽山を貶め、夷斉を刑余流罪の人として書いたものはない。

さて、普通にはたとえば、「清風を貪士に厲まし、果志を懦夫に立たしむ」（王粲「弔夷斉文」）とされる夷斉を、実は無慙な死を遂げた者と強調した作者が、美論の虚妄と慎重な生き方の必要を説き、放誕と多言、そして慷慨の発言とを戒め、清虚の態度をとることにより精神の安らぎを保守することをいうのは、既述したとおりである。そしてここに作者の夷斉批判の意図が存するのである。

すなわち道義に名を仮りて軽挙に走った夷斉は、自らその生を残うという最も忌むべき運命を招くこととなった。そしてこの夷斉の過ちは、単なる伝説ではなく、苛烈暗黒の現代にそのまま繰り返されている。権力争奪の犠牲となって不幸な死を遂げた者の数は多い。そうした人々は、現実の虚妄さに気づくことなく、自らの生を愛惜することを忘れて、痛ましくも無慙な運命の淵に沈んでいった。自分が司馬氏に帰属するのは、自らの生をどこまでも愛惜する立場に立つからである。阮籍は夷斉批判に名を仮りて、右のように現実の険しさを痛み、自己の立場を明らかにしたものと、私は思う。

換言するならば、阮籍はこの賦において、彼の魂の慟哭を聴きつつ、彼の「遠識」の立場を語っているのである。このことは、賦という文体において自己を語る場合の特徴として考えるべきであろう。「詠懐詩」其三の作には次のようにいう、

嘉樹下成蹊　　嘉樹　下に蹊を成す
東園桃與李　　東園　桃と李と
秋風吹飛藿　　秋風　飛藿を吹けば
零落從此始　　零落　此れ従り始まる
繁華有憔悴　　繁華には憔悴有り

堂上生荆杞　堂上には荆杞を生ず
驅馬舍之去　馬を駆りて之を舍てて去り
去上西山趾　去りて西山の趾に上る
一身不自保　一身すら自ら保せざるに
何況戀妻子　何ぞ況んや妻子を恋ひんや
凝霜被野草　凝霜　野草を被えば
歳暮亦云已　歳暮　亦云に已まん

吉川幸次郎氏は右の詩を「其九」の詩とともに、作者阮籍のその暗黒の時代に対する「絶望の口吻をもらす」ものとされ、そして「其三」の後半について次のようにいわれる。

『『繁華には憔悴有る』流転の世界をさけんとする彼は、永遠の世界を求めて、西山の趾に上る。しかしそこでも平安は得られず、わが身の生命さえも危ぶまれる。それは凝霜が野草をとじこめるごとく、何の生活の可能性もない暗黒の世であるからであるとするのが、この詩の結論である。(11)』

吉川氏のことばのごとく、「詠懐詩」其三において阮籍は、夷斉を慕うべきものとし、しかし夷斉のごとく生きたとしても、凝霜のごとき深刻な刑罰が力を奮う事態ともなれば、この世界は暗黒の終末をむかえ、もうどんな生き方も許されはしないと、絶望を述べるのである。ここには「首陽山賦」のごとき「遠識」を以て世に処する立場は語られることはないのである。この相違は、やはり五言詩と賦という文体の相違に帰せられるものであろう。

ところで阮籍の友嵇康には次のような逸話がある。それは隠者孫登が、「きみは才が多く識が寡いから、今の世で危害を免れるのは難いであろう。」といったという話である。

登乃曰、……用才在乎識物、所以全其年、今子才多識寡、難乎免於今之世矣、子無多求。康不能用、及遭呂安事在獄、爲詩自責云、昔慙下惠、今愧孫登。(『世説新語』棲逸第十八劉注所引『文士傳』)

同時代に親友として生きた嵇阮の両者が、一方は「識寡し」とされ、非命に倒れてその「幽憤詩」を遺し、他はその「遠識」を称され、天命を全うして「首陽山賦」を留めている、そのことの中に私は、阮籍の「遠識」がその慟哭のうえに成りたっている痛ましさを感ぜざるを得ないのである。阮籍にとって「首陽山賦」は、そうした作品だと思うのである。

(山形大学)

〔注〕

(1) 私が見ることを得た「首陽山賦」についての論は、Ⓐ中島

千秋氏「阮籍の『論』と『賦』とについて」（「日本中国学会報」第九集、昭32年）Ⓑ藤原尚氏「阮籍・嵇康の賦」（「広島女子大学文学部紀要」第十五輯、昭55年）Ⓒ[1]松本幸男氏「阮籍の生涯と詠懐詩」（昭52年、木耳社）Ⓒ[2]松本幸男氏「阮籍の『詠懐詩』について」（「立命館文学」第三八四～五号、昭52年）の四篇がある。Ⓐはこの賦を「権力の交替に身を処する人士の醜態と偽瞞を諷刺し、兼ねて景王にも及ぼしたもの」とする点、内容の理解に誤りがあると思われる。ⒷもⒶと同様内容を誤解している所があり、たとえば「現実の政治をよりよくしようとすればこその嘆き」が見られるとするのは首肯できない。Ⓒ[1]Ⓒ[2]はこの賦と「詠懐詩」其三・其九の二詩を同時の作とし、其三の詩を夏侯玄の死と関連させ論じているのは興味深い見解であると思う。

（2）「山形大学紀要（人文科学）」第十巻第三号。昭59年。

（3）太后曰、「……吾以爲高貴鄉公者、文皇帝之長孫、明皇帝之弟子、於禮、小宗有後大宗之義、其詳議之。」景王乃更召羣臣、以皇太后令示之、乃定迎高貴鄉公。（『三國志、魏書』三少帝紀裴注所引）

（4）罷朝、景王私曰、「上何如主也。」鍾會對曰、「才同陳思、武類太祖。」景王曰、「若如卿言、社稷之福也。」（同右）

（5）薛仲山・歐陽頤合編『兩千年中西曆對照表』（一九六一年、商務印書館）によった。

（6）譚其驤主編『中國歴史地圖集』第二冊、―秦西漢・東漢時期―（一九八二年、地図出版社）によった。

（7）案阮公首陽山賦、……與去上西山趾・歳暮亦云已合、此首蓋與賦同時之作也。

（8）魏氏春秋曰、帝升壇禮畢、顧謂羣臣曰、「舜、禹之事、吾知之矣」（『三國志、魏書』文帝紀裴注所引）

（9）嵇康「與山巨源絶交書」（『文選』巻四十三所収）

（10）晉文王稱、阮嗣宗至愼、每與之言、言皆玄遠、未嘗臧否人物。（『世説新語』德行第一）

（11）吉川幸次郎氏「阮籍の詠懐詩について」（上・下）（『中国文学報』第五・六冊、昭31・32年）